

### 3. COVID-19 への対応

#### 1) 学内

##### (1) 予防接種

新型コロナワクチン優先接種対象である“医療従事者等”枠に看護学生が含まれるという厚生労働省からの通知を受け、ワクチン接種の早期実現に向けて関係者が努力を重ねてきた。高知県、そして高知医療センターの全面的な協力により、令和3年6月30日（第1回）と7月21日（第2回）に池キャンパスでワクチンの集団接種を実現できた。

接種までの準備から接種当日も、高知医療センターの医師・看護師・薬剤師・事務職員の方々に、予診やワクチン製剤の調剤、接種後の観察、体調変化者への対応、予診票の整理について、ご尽力いただいた。また、本学事務職員は、関係機関との調整や会場設営、受付、誘導などを担い、医療資格をもつ教員や大学院生が、ワクチン製剤の調剤やワクチン接種の実施、被接種者のサポートを担当した。

ワクチン接種に関する様々な情報が錯綜しているなかでの集団接種であり、実施に際しては、ワクチン接種に不安を抱く学生がいることを考慮する必要があった。そのため、事前に学生全体に対して、ワクチン接種に関する正しい知識の提供や、相談窓口の情報を提供した。また、ワクチン接種は保護者とも相談したうえで学生の自由意思で決めることを確認し、接種当日にも相談窓口を開設するなど、学生自身が主体的に健康管理を行えるよう支援した。

ワクチンの確保に始まり、学生支援、高知医療センターとの協力による実施体制の整備によって、ワクチンの集団接種を安全に実施することができ、学生や地域の健康を守り、安全で安心な学習や実習ができる教育環境を整えることにつながった。



##### (2) 予防接種勧奨

予防接種に対する誤解や、副反応に対する不安から、予防接種を希望しない学生が認められたため、これらの学生に対して学年担当教員から情報提供を行った。看護学部木下教授が動画「予防接種を受けないかもしれない人へ」を作成した。この動画は、看護学部・看護学研究科学生に対して UOKLMS 上でオンデマンド配信をするとともに、全学学生、教職員を対象として、永国寺、池両キャンパスのデジタルサイネージで期間中繰り返し放映された。



## 2) 対外支援

### (1) 高知県・高知市への応援対応

#### ① 第4波（5月連休頃）

令和3年度に入り、高知県内でも4月中旬ごろから陽性者が増え始め、5月の連休中に多少減少したかに見えた陽性者は5月中旬から6月にかけて38名を最大に20名前後で推移した。第4波と呼ばれるこの時期、県は症状の出現した陽性者を再び宿泊療養施設に収容し、健康観察を行った。特にホテルの個室施設では対応の難しい家族単位や、障がい者施設の入所者と陽性スタッフといった人々を、高知医療センター向かいの「やまもも」で受け入れることとし、この療養施設での健康観察業務について、大学院生への応援要請を受けた（5/4-9の内3日間：3名、M1派遣）。

#### ② 第5波（8月～9月）：宿泊療養施設「やまもも」の支援

次の第5波は主にデルタ株による感染拡大であり、8/10過ぎから陽性者が増え始め、8/25には県内最多の111名を記録した。市内ホテルの宿泊療養施設2か所における看護師の健康観察は、人材派遣会社に委託することになり、大学院生には派遣会社への登録依頼があった。実践演習、学修課題を勘案し、指導教授と相談しながら学生3-4名が登録した。

しかしここでも、ホテルだけでは対応の難しいケースについて、宿泊療養施設「やまもも」を高知県が直接運営することとなり、その立上げからの2週間（8/29～9/10）、本学が主に宿泊療養者の健康観察業務を担った。この間、日勤延べ14名・夜勤延べ13名を7名のM1と教員4名で運営した。デルタ株による有症状者は、短時間に肺炎が増悪するケースもあり、この間のホテル療養支援者は何人かが酸素濃縮器の装着のためにレッドゾーンに入っている。「やまもも」では直接対応が無いよう県にはサポート体制を依頼したが、大学の方でも活動する上での個人防護の準備や勤務ごとの情報共有を充分に行えるよう、学内のサポート体制を整えた。

#### ③ 第5波（8月～9月）：高知市保健所の在宅療養者健康チェックの支援

8月後半には陽性者が連日50名を超え、宿泊療養施設の準備が追いつかなくなったため、高知市もいよいよ在宅療養で対応することとなった。しかし訪問診療・訪問看護の対応が行われなかったため、高知市保健所では、日中に在宅療養者の電話による健康チェックを開始した。神奈川県方式のコロナ患者用トリアージによって、重症度を赤、あるいは黄色と判定された数十名の在宅療養者に対し、連日午前中に電話での健康チェックを行う用務である。連日数名ずつは受診支援や入院支援につながった。

夜間は緊急の電話相談対応である。8月末には1晩に数件あった緊急連絡も、日中の健康チェックが行き渡ると、後半はほとんど夜間の電話はなくなっていたようである。

この時期の支援には、教員が9名、夜間は教員1名、院生（M1）2名が対応している。

第5波 高知市保健所支援

		日中		夜勤
		AM	PM	
8/28	土	1	1	
8/31	火			1
9/1	水	3	3	
9/2	木	4	3	1
9/3	金	4	3	
9/6	月	3	1	
9/7	火	3	2	
9/8	水	2	2	1
9/9	木	3	3	
9/10	金	3	3	1
9/11	土			1
9/18	土			1
9/25	土			1
延べ人数		26	21	7

日中：教員9名、

夜間：教員1名、院生2名

④ 第6波（令和4年1月～3月）：高知市保健所の在宅療養者健康チェックの支援

第6波は、令和4年1月中旬から、オミクロン株により急速に陽性者数を増やした。1日の陽性者が1/12には12人であったが、その後1/21には107名、2/1には200名を超え、2/11には最多の301名を記録した。在宅療養者が一気に1000名近くとなったため、再度高知市から応援要請を受けた。

学内ではまだ領域看護実習の最中であり、今後、試験週間なども控えていたため、原則午前中のみで2名ずつ、支援に入ることにした。高知市の方でも、県・市の保健師OGスタッフの受け入れ、他部署事務職（ロジスティック）の導入、高知大学看護学科への応援要請など、本学以外にも多数の支援者を受け入れる体制を構築しており、第5波以後、体制の見直しを行っていたことが伺えた。

学部内でも2カ月近くの長期にわたったため、第5波を経験した教員を第1陣に投入し、その後、徐々に新しい教員にもお願いした。最終的に、延べ89名、実質21名の教員に活動してもらうことができた。

第6波 高知市保健所支援

(月) ~ (日)	人数	* 日数
1/24 ~ 1/30	2名	* 4日
1/31 ~ 2/6	2名	* 6日
2/7 ~ 2/13	2名	* 6日
	1名	* 1日
2/14 ~ 2/20	2名	* 6日
2/21 ~ 2/27	2名	* 7日
2/28 ~ 3/6	2名	* 6日
3/7 ~ 3/13	2名	* 7日
3/14 ~ 3/15	2名	* 2日

延べ89名（45日）

(2) 高齢者施設への応援派遣

令和4年2月に大規模感染クラスターが発生した県内の高齢者施設に対し、管轄福祉保健所から本学に人員派遣依頼があり、看護学研究科災害・国際看護学領域が中心となって対応した。多くの認知症の利用者が制限区域を往来してしまう状況の中で、全員の健康状態と早期の感染者の把握が喫緊課題となっていたが、限られた人数のスタッフで、一人ひとりに必要なケアを行いながら、健康チェックをし、その結果を記録、報告することが、施設スタッフの大きな負担となっていた。そこで、令和4年2月18日～3月10日の期間毎日、本学が施設内オフィスの一画（緑ゾーン）にPC2台を構え、利用者の健康状態経過や看護記録の整理、スタッフからの情報収集、情報伝達、保健所や搬送先医療機関等への報告、入院時サマリの作成などを行って、現地の看護業務をサポートした。この活動には、本学より5名の教員と、5名の大学院生が参加した。